

24) 蘇えるか？ 歯力女

Tooth appeal beauty or “hadzikalla”-women sumo wrestler?

九州歯科大学 ○片岡正太, 竹原直道, 安細敏弘

Shota Kataoka, Tadamichi Takehara and Toshihiro Ansai, *Kyusyu Dental University*

旧聞に属するが、2007年9月25日および10月2日の日本歯科新聞は、電動ハブラシ・新ソニックケアの発売を記念した「歯デカラ女」第1号に、タレントの辺見えみりさんが選ばれたと報じた。明治から昭和初期に盛んだった女相撲の見世物芸に、歯力女と称して100 Kg程の米俵を歯で銜えてみせる出し物があったが、これが復活したのか。それにしても辺見えみりさんは、あまりにも華奢で、米俵など銜えられそうもない。歯デカラは目デカラと同様、魅力的な歯という意味で用いられたものか。

歯力女は興行女相撲の余興の一つであったが、女相撲は研究対象としてまともに取り上げられることは少なかった。しかし最近、亀井好恵『女相撲民俗誌：越境する芸能』（2012）を始め、金田英子、一階千絵の論文など女相撲に関する研究もようやく増加してきた。一般の関心も高まり、NHKの「タイムスクープハンター」が、大正期の女相撲を取り上げている（2012）。また現代の女子相撲はブーム再来状態で、国際大会も開かれ、NHK「あさイチ」では、小学生の女子相撲に取材が及んだ（2014年6月26日）。一方、江戸時代の見世物芸「歯力男」については、歯科医史学に関する先人の書籍に散見される。しかし歯力女に関する報告は見かけない。そこで今回の発表では、歯力女の事例を探すとともに、女相撲についても考察を試みたい。

女相撲：女相撲は『日本書紀』雄略天皇条に記述があり、古い起源を持つ。しかしその後ほとんど文献はなく、よく判っていない。文献資料が増加するのは、江戸時代も後期になってからで、見世物興行の一つとしてその隆盛とともに盛んに行われるようになった。明治以降は女性が裸体を晒すのは対外的に外聞が悪いとの理由で、警察の取締り対象となった。

女相撲は、その形態から3つに分けることがで

きる。一つは女草相撲で、明治から昭和にかけて全国各地に女草相撲が存在した。男の取る草相撲は明治～昭和期には大人気で、各地で行われた。女草相撲も地域により偏りがあるが、やはり人気があった。二つ目は江戸見世物の流れを汲む興行女相撲で、有名な山形の石山女相撲、高玉女相撲、平井女相撲がよく知られている。彼らはプロの一座で全国を興行して廻り、ハワイ興行もこなしている。三つ目が相撲芸者と呼ばれるものだが、お座敷で女相撲の真似をしていただけなので、ここでは取り上げない。

歯力：歯力男は江戸の見世物興行のなかでは人気があったものの一つで、当時の摺物に見ることができる。では歯力女はというと、明和5年（1768）に坂額（はんがく）という女力士が、4斗（60 Kg）俵を歯力で振り回したという（亀井による）。明治～昭和期の女相撲では、歯力の他に櫓積（受）、五人持、六人背負、腹受餅搗などがあった。いずれも興行女相撲の出し物であり、女草相撲で行われたという記録は今のところ見かけない。しかし男の草相撲には神社で大石を持ち上げる力持、力自慢があり、女でも大力女は江戸時代から存在するから、女草相撲に歯力女はなかったとは断言できない。

実は歯力は日本の専売特許ではなく、世界中で行われている見世物芸である。ネット上では、歯力で車や列車、果ては飛行機を動かす、板に打ち込まれた五寸釘を歯で引き抜く、歯力で人間をぶら下げる、歯で椰子の実の皮を剥く、といった写真を閲覧することができる。

歯力と口腔の健康：歯力女の口腔健康状態に関する情報は全くないが、齲蝕や歯周病はなかっただろう。もし歯が悪ければ、100 Kgといった重みに耐えることはできない。日本の例ではないが、1935年に人間を歯力で吊り下げた John M. Hernic という歯力男は、20年以上歯ブラシや歯

磨剤を使ったことがないと自慢している (“Dear Mr. Ripley” Mark Sloan et al. 1993). 歯磨きは当然という世相に反発することで自己アピールして

いるのは興味深い.

結論：昭和初期までの歯力女と、現代の「歯デカラ女」は全く別の意味に使われている.